

海道東征

JJ1SXA/池

「海道東征」(かいどうとうせい)は、北原白秋詩、信時潔曲による交声曲(カンタータ)である、1940年に皇紀2600年を祝賀する皇紀2600年奉祝曲として作られた、白秋晩年の大作、信時の代表作である、ちなみに、信時潔は「海ゆかば」の作曲者としても知られている。

日本神話を元にしたもので、天地開闢、国産み、天孫降臨、神武東征、大和政権の樹立までの物語を扱っている、海道東征といっても、決して太平洋をはるばる東に進軍し対岸を侵攻する内容ではなく、九州から畿内への海路を指したもので、曲は以下の8章からなる。

- 1.高千穂(たかちほ)
- 2.大和思慕(やまとしぼ)
- 3.御船出(みふなで)
- 4.御船謡(みふなうた)
- 5.速吸と菟狭(はやすいとうさ)
- 6.海道回顧(かいどうかいこ)
- 7.白肩津上陸(しらかたのつじょうりく)
- 8.天業恢弘(てんぎょうかいこう)

初演は1940年11月26日、日比谷公会堂にて木下保指揮、東京音楽学校管弦楽部他の手で行われ、その後広く演奏されたが、太平洋戦争終戦後はナショナリズムを極端に忌避する動きのため事実上の封印状態におかれた。

北原白秋はこの作詩時には、ほぼ失明状態だったので、資料となる「古事記」や「日本書紀」などは家族に読んでもらい、書くこともできず、口述筆記だったそうです、しかし、この白秋が死力を尽くしたような「海道東征」は戦後、白秋を論ずるに際して黙殺されてきた、これもまた、「戦後民主主義」の欺瞞であった。

戦後における完全な形での演奏は1962年に行われた阪田寛夫の企画によるものと2003年のオーケストラ・ニッポニカによるもののみが知られている。

今度、2月11日の「建国記念の日」に熊本市で演奏されることになった、山田和樹指揮で管弦楽団は横浜シンフォニエッタという一流によって演奏される。

新保祐司・都留文科大学教授は、産経新聞の1月1日正論で…『「日本人に返れ」の声が聞こえる』…で「海道東征」が日本全国で演奏されるべき時代になってきたのではないかと書いていたが、2月6日正論で…『合唱から始まった現代の「東征」』で、熊本市で演奏されることになったのは喜ばしいことであり、精神史上の事件ともいえるであろう、…「海道東征」の復活は、現代において日本の精神の神髄が「再び海道を上がってくる」ということだからである。…と書いている。(9.Feb,2014 記)